

スペイン語の多人数授業とマルチメディア教材

上田博人

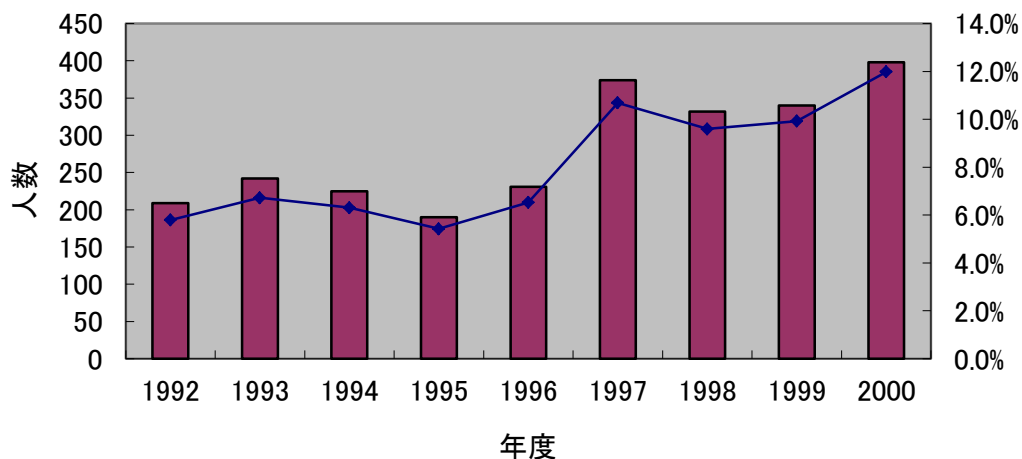
1. スペイン語の履修者

筆者が勤務する東京大学・教養学部で第二外国語としてのスペイン語の履修者数が近年著しく増加していることは、以前の機会に触れた (Ueda 2000, 上田 2000)。

【表】 スペイン語の履修者数

年度	総数	スペイン語	%
1992	3606	209	5.8%
1993	3599	242	6.7%
1994	3567	225	6.3%
1995	3501	190	5.4%
1996	3539	231	6.5%
1997	3499	374	10.7%
1998	3459	332	9.6%
1999	3425	340	9.9%
2000	3320	398	12.0%

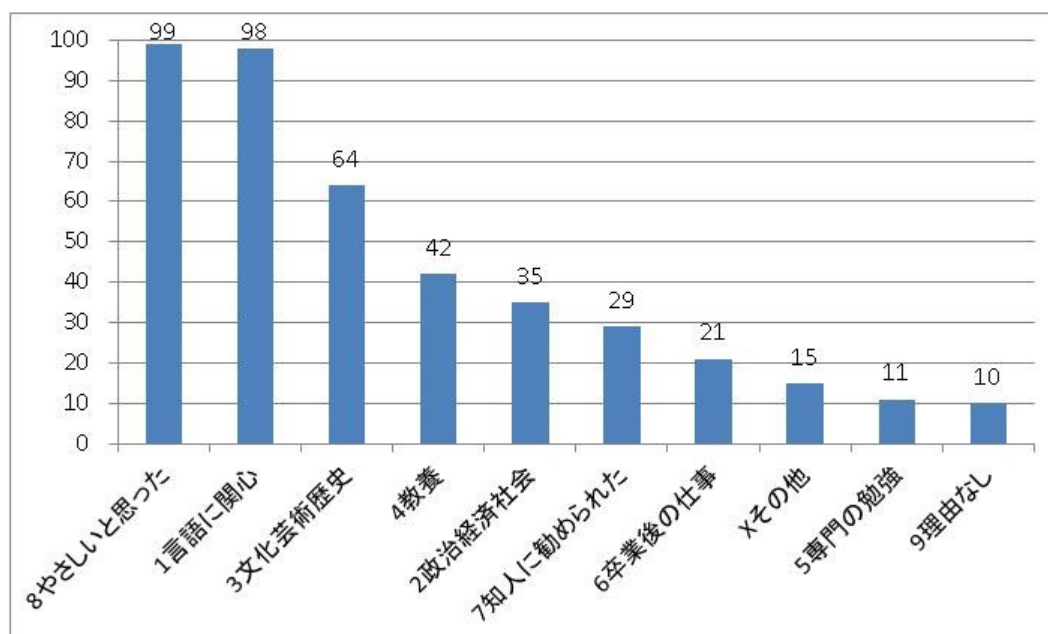
表1は過去8年間の教務データであるが、これをグラフ(図1)で見ると最近の過去4年間(1997-2000年)がとくに大幅に増加していることがわかる。



【図-1】 スペイン語の履修者数

このような履修者の増加については、いまだ詳細な分析はできないが、一つのデータ

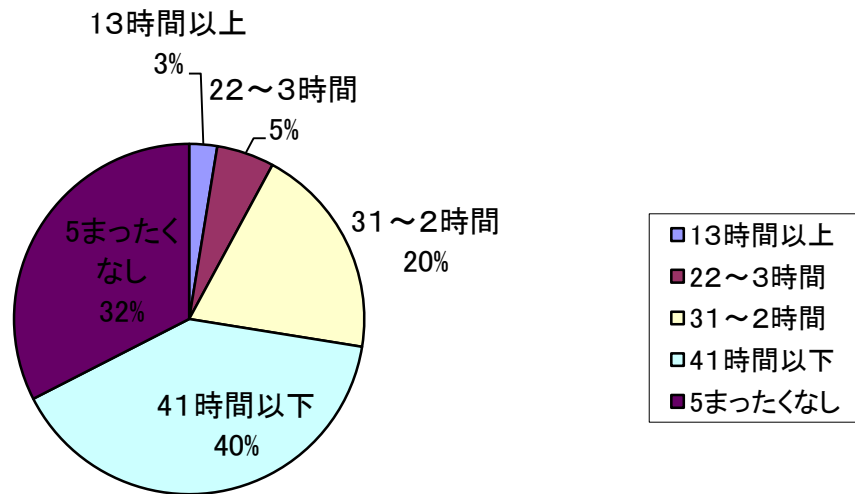
として履修者がスペイン語を選択した動機があげられる。1999年に1年生のスペイン語選択者全員にアンケート調査を実施した結果（東京大学教養学部, 2000），とくに重要な動機として「スペイン語そのものに関心がある」（16％）と並んで、「スペイン語が他の言語と比べてやさしいと思った」（16％）があった。それに続く動機は、「スペイン語圏の文化・芸術・歴史に興味がある」（10％）があり，他の「教養」，「専門の勉強」，「将来の仕事」などはすべて5－7％以下である（図-2）¹。



【図-2】 スペイン語選択の動機（人数．複数回答可）

選択の第二の理由の数値が高いことは，看過しがたい事実であり，これは一般の学生に共通した言語観であるようだ。それを裏付けるデータが次である（図-3）。

¹ 「教養のため」（7％），「政治・経済・社会に興味がある」（6％），「知人に勧められた」（5％），「将来の仕事」（3％），「専門の勉強」（2％）。「とくに理由がない」が2％なので，スペイン語の選択にそれなりの動機があるは確かである。

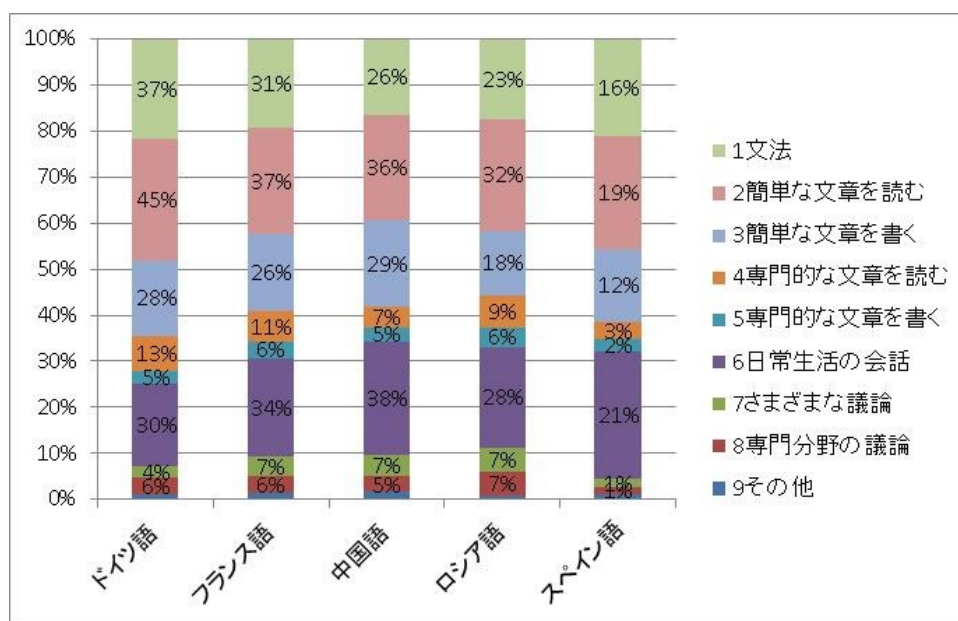


【図-3】 1週間の勉強時間 (%)

スペイン語がやさしい言語であると思われているためかどうかは判然としないが、1週間の勉強時間が「まったくなし」(33%)や1時間以下(39%)であることは、教師として知っておかなければならない²。これを否定的に見るならば学生に勉強意欲がないと言えるだろうが、一方で彼らの生活をかいま見ると勉学やそれ以外の活動で非常に忙しいということもわかる。週に3時間の授業をこなしていただくだけでも、多くの努力を要するのである。専門課程の学生ならば当然多くの時間を集中することができるが、前期の教養課程では多くの授業と課題、教室外の活動できわめて困難である。

アンケートの結果のもう一つ重要な項目として、「身につけたい能力」がある(図-4)。これを見ると、履修者は、文法(16%)、簡単な文章を読む(19%)、簡単な文章を書く(12%)、日常生活の会話の能力(21%)を身につけたいと希望しているが、一方、専門的な文章を読む(3%)、専門的な文章を書く(2%)、さまざまが議論ができる(1%)、専門分野の議論ができる(1%)、というレベルを希望している者はわずかであることがわかる。

² これはスペイン語だけに限ったことではなく、全ての外国語を総合しても、「まったくなし」(25%)や1時間以下(46%)であった。




【図-4】身につけたい能力（人数. 複数回答可）

スペイン語履修者の近年の急速な増加と勉強時間不足という2つの問題を対処するためには、従来の少人数教室で行われていた方法（文法・訳読・練習・会話など）を大きく改革しなければならない。1時間以内しか自習していない学生を対象に、しかも多人数の教室で、効果が高く（すなわち、落ちこぼれを最小とする）、彼らの希望にできるだけ添うような授業を行うために、どのような方法と教材が考えられるだろうか。

2. マルチメディア教材



多人数教室での授業方法については以前に発表したので（Ueda 2000, 上田 2000a, 2000b）, ここでは多人数教室で可能なマルチメディア教材を紹介したい³。

一般に「マルチメディア教材」というと、コンピュータの操作に慣れていない人にとって近づきがたい技術を要するようなものに思われている。しかし、ここで必要な操作はクリック（画面上にあるアイコンの上にカーソルを置き、マウスのボタンを押す）によるジャンプだけである。ソフトウェアの中で展開されるテキスト内では、次の3つのアイコンが各所にある。

- 
テキストリンク：クリックすると各項目の説明・解答・関連するファイル

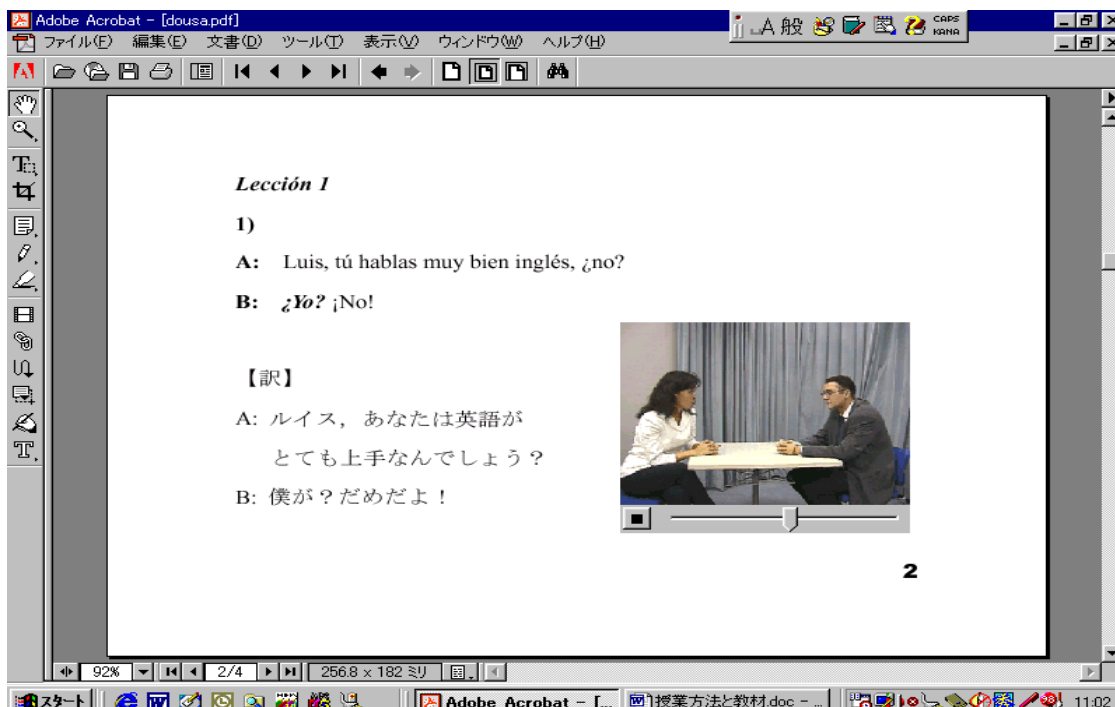
³ 東京大学・教養学部のスペイン語部会では『CD-ROM で学ぶ初級スペイン語』という教材を作成している。これは以前に作成したリャノ他 (1997)への建設的な批判を受けて内容と形式（構成）を大きく変え、教科書本冊の内容をスリム化するとともに、多くのマルチメディア教材（文字・写真・音声・動画）を CD-ROM に配置したものである。なほ本項の一部は上田 2000b と重なる部分がある。

が閲覧できる。また、本文(Texto)の文番号をクリックすると解説にジャンプする。

-  **音声リンク**：クリックすると音声再生される。長文の場合には、この右上のスペースをクリックするとコントローラが現れる。
-  **ビデオリンク**：クリックするとビデオ再生される。

全体は「文字と発音」に続く12課という構成である。各課の内容は次の通りである。

- **目次**. (写真) (文字：以下の項目にリンク)
- **本文**. (写真) (音声) (文字：本文の説明)
- **質問**. (写真) (音声) (文字：解答)
- **文法**. (写真) (音声) (文字：文法の説明)
- **練習**. (写真) (音声) (文字：解答)
- **西訳**. (写真) (音声) (文字：解答)
- **観察**. (写真：街角の文字情報)
- **動作**. (写真) (ビデオ：非言語伝達・ジェスチャー)
- **表現**. (写真) (音声)
- **鑑賞**. (写真) (音声：スペインの歌)



【図-5】テキストとリンクされたビデオ教材の例

東京大学スペイン語部会では、従来の「文法」「講読」「口頭練習」という編成を改め、2000年から「理解」、「獲得」、「応用」という新編成に移行した。教材もそれに合わせ

て、「理解」の授業では「本文」と「文法」を2週間で1課進行する。これは、2クラスを合併した大クラスと呼ばれる一斉授業である。「獲得」の授業では、ほぼ同じ進度で「文法」と「質問」、「練習」、「西訳」を扱う。これは、小クラスで学生の個人的な質問などにも答えられる規模である。「観察」、「動作」、「表現」、「鑑賞」は、単調になりがちな語学の授業の息抜きに教師が適切に利用したり、また長期の休暇の宿題に使うことが考えられる。

現在、情報技術のさまざまな革新が進んでいるなかで、スペイン語などの外国語教育についてもその応用が模索される。しかし現状では高いレベルにまで達したハードウェア技術に対して、肝心の応用ソフトウェアが追いついていない。スペインや外国のビデオ教材・マルチメディア教材は文法的な段階性がないので、大学のスペイン語教育には直接利用することがむずかしい⁴。

また、教材の中には見戲のような「ゲーム」(juegos)を織り込んで、利用者を飽きさせない「工夫」が見られる。しかし、大学の授業と関連させたプログラムでは多彩で目まぐるしいほどの効果を狙うよりも、むしろシンプルで体系的な配置であるほうが使いやすいし、学習者の体系的なオリエンテーションのためにもよいと、筆者は思う。また、ゲームが学習者の多様な趣味に必ずしも合致するものでないことは、アンケート調査などの結果からも明らかである。「楽しさ」は、「効果」に従属させるべきであるし、むしろ効果的であることから実現される「楽しさ」を追求すべきである。

コンピュータ用に開発されたスペイン語教材の報告として、堀田(1990, 1992, 1999, 2000)や高橋(1993, 1994)などがある。このように、これからは既存のソフトウェアを安易に渉猟するのではなくて、大学の授業の編成・内容を熟知した教師自身がコースウェアを作成することが必要となるだろう。幸い、現在ではマルチメディア教材はワードプロセッサなどの一般の文書作成用のソフトでも十分に作成可能となっている⁵。

4. インターネットの利用

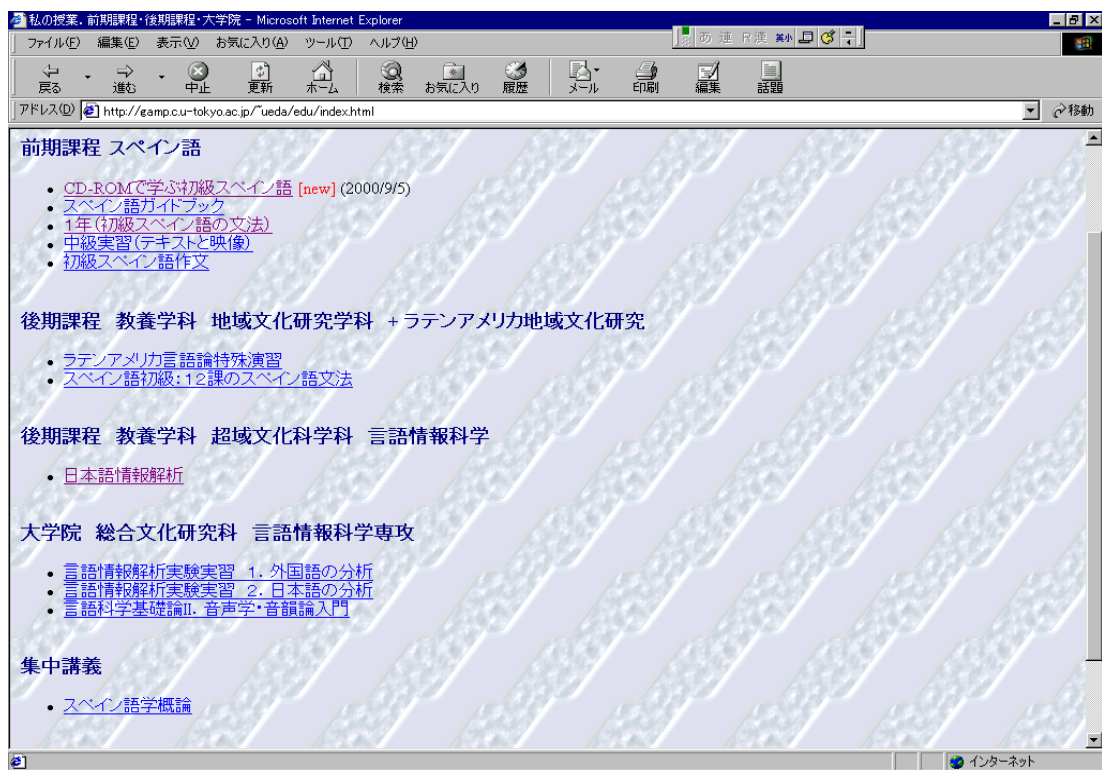
先に述べたように一般に学生の自習時間は非常に少ない。これに対して努力を促す精神論や宿題・小テストなどの動機付けだけで、さらに多くの時間を勉強させてよいものだろうか。教養課程の学生は教室内外で多くのことを学ばなくてはならないので、スペイン語の時間ばかりに割くわけにはいかないようである。むしろ可能な少ない時間を有効に・有意義に使う方法を考えるべきであろう。

⁴ Ministerio de Educación y Cultura de España (2000) が現在の最新資料である。Echeverría (1994, 2000)は母国語としてのスペイン語教育教材である。上野 (1995) は *Viaje al Español* (Universidad de Salamanca / Radiotelevisión Española, 1993)のオリジナル版の長所を認めた上で、「練習問題がパターン・プラクティスの域を出ない点と不十分な時制の扱い」を克服するためにNHK教育テレビ『スペイン語会話』版を併用させている。

⁵ 東京大学スペイン語部会編(2000)では、Microsoft Word で作成したテキストを Acrobat Writer で PDF 文書にした上で、文字、音声、画像、動画をリンクさせた。

現在では、教室を離れた学生に対してのケアをインターネットのホームページ (HP) で簡単に行うことができるようになった。スペイン語の教育での利用で考えられる手段として次があげられる。

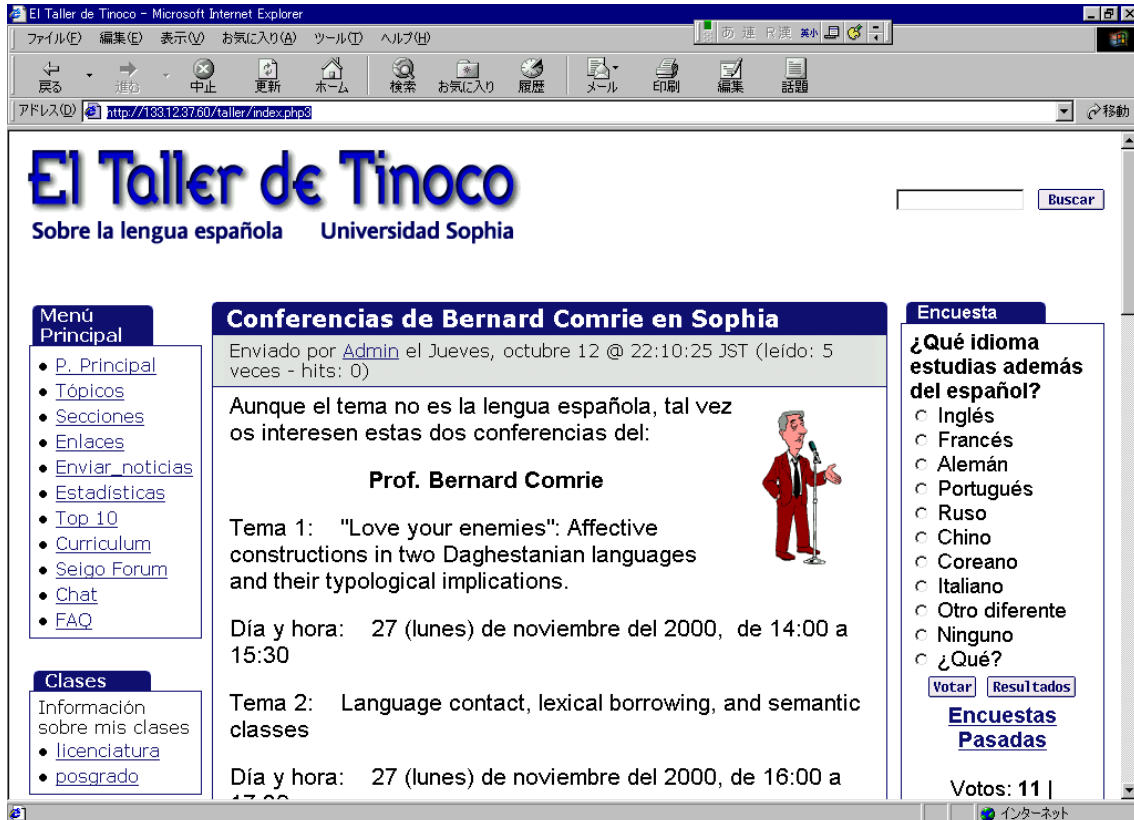
(1) 詳細なシラバスと授業進行の掲示。大学から配布される冊子では、各授業に当てられるスペースが数行どまりである。これでは、内容の羅列にすぎないので学生のオリエンテーションにはならない。HP ならばかなり詳細にシラバスを書き込むことができる。毎回の授業進行や内容・予定の周知についても、その都度 (リアルタイムで) 書き込むことができるので便利である。これは冊子やプリントでは不可能である。しばしば繰り返される質問についても、HP 上でインデックスをつけて整理できる。



【図-6】 <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/edu/index.html> (Hiroto Ueda)

上の図のホームページでは (図-6), 担当教師の前期課程 (1・2年生) と後期課程 (3・4年生) 及び大学院の授業のシラバスと進行を随時掲載している。また集中講義などで、遠隔地の学生とコミュニケーションをとることも HP ならば可能である。

次のホームページを見ると (図-7), さらに高度な技術が生かされて、画面に学科で催される講演会や研究会をはじめ学生に向けての様々なニュースや連絡の場となっていることがわかる。

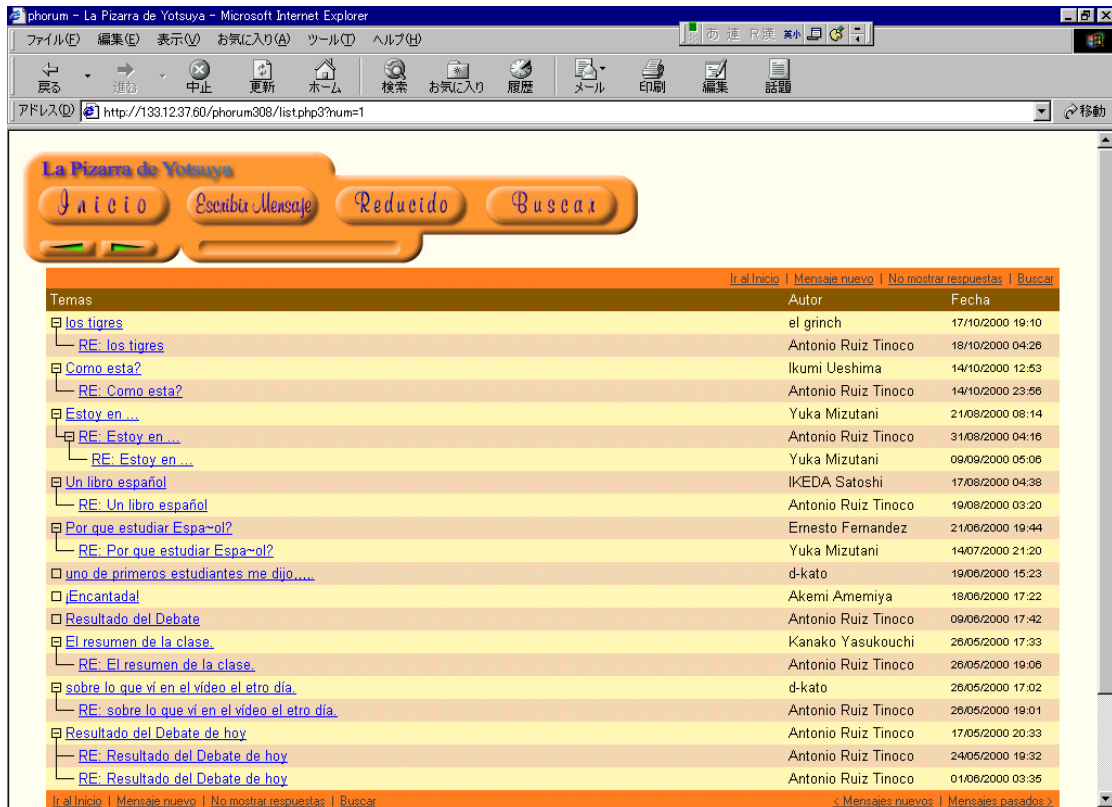


【図-7】 <http://133.12.37.60/taller/index.php3> (Antonio Ruiz Tinoco)

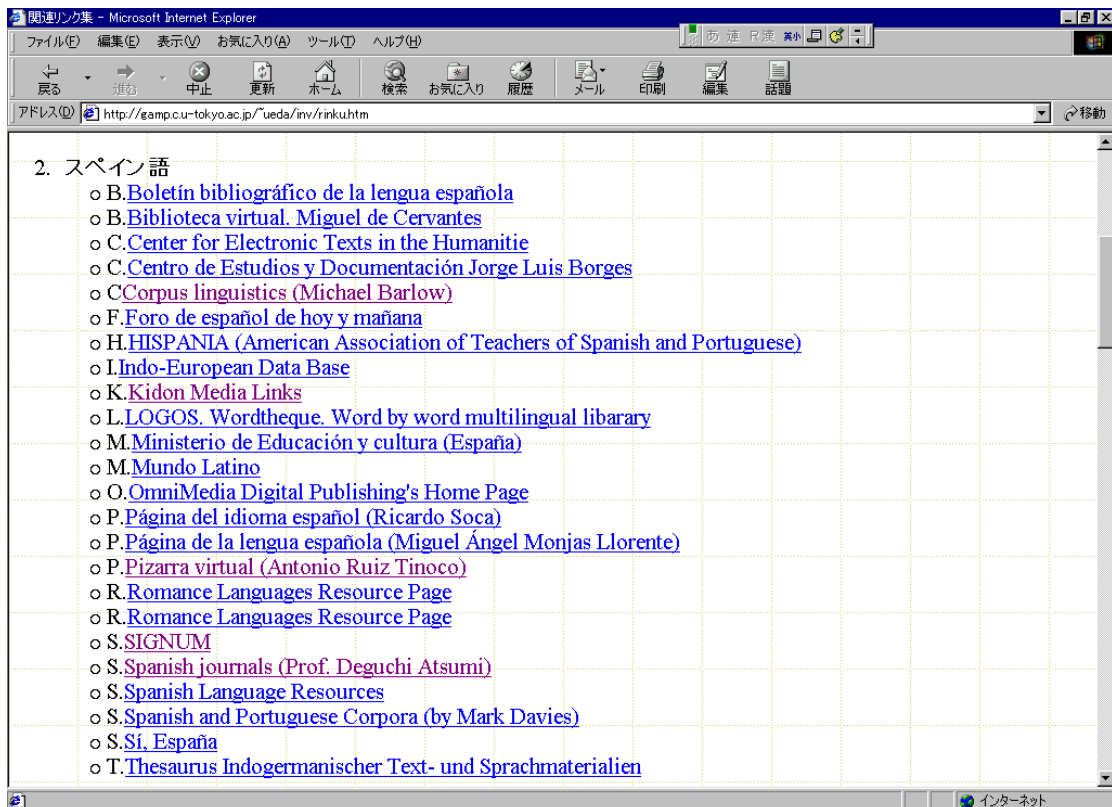
(2) 学生と教師のコミュニケーション. 大人数教室では困難な質問・解答, 参考書の紹介, 一般的な相談も E-メールを使えば個別に対応できる. E-mail は HP の中にリンクさせることができるので, 学生は HP にアクセスさえすれば, ほぼ半日, 遅くても 1 日で返事をうけとることができる (Antonio Ruiz Tinoco, 1997).

次の HP (図-8) では学生の自発的な作文にネイティブの教師がコメントを入れている. このような双方向性のあるコミュニケーションは言語の教育において大きな意味を持つはずである.

(3) 世界を見る. HP 上にリンクされた世界中の関連サイトは, 教材を教科書だけにとどめず, 視野をさらに広げてくれる. 現在では文章 (テキスト) だけでなく, 画像・音声・ビデオなど多くのマルチメディアの材料が教材として使用可能である. 図-9 はスペイン語教育・研究に役立つリンク集の例である.



【図-8】 <http://133.12.37.60/phorum308/list.php3?num=1> (Antonio Ruiz Tinoco)

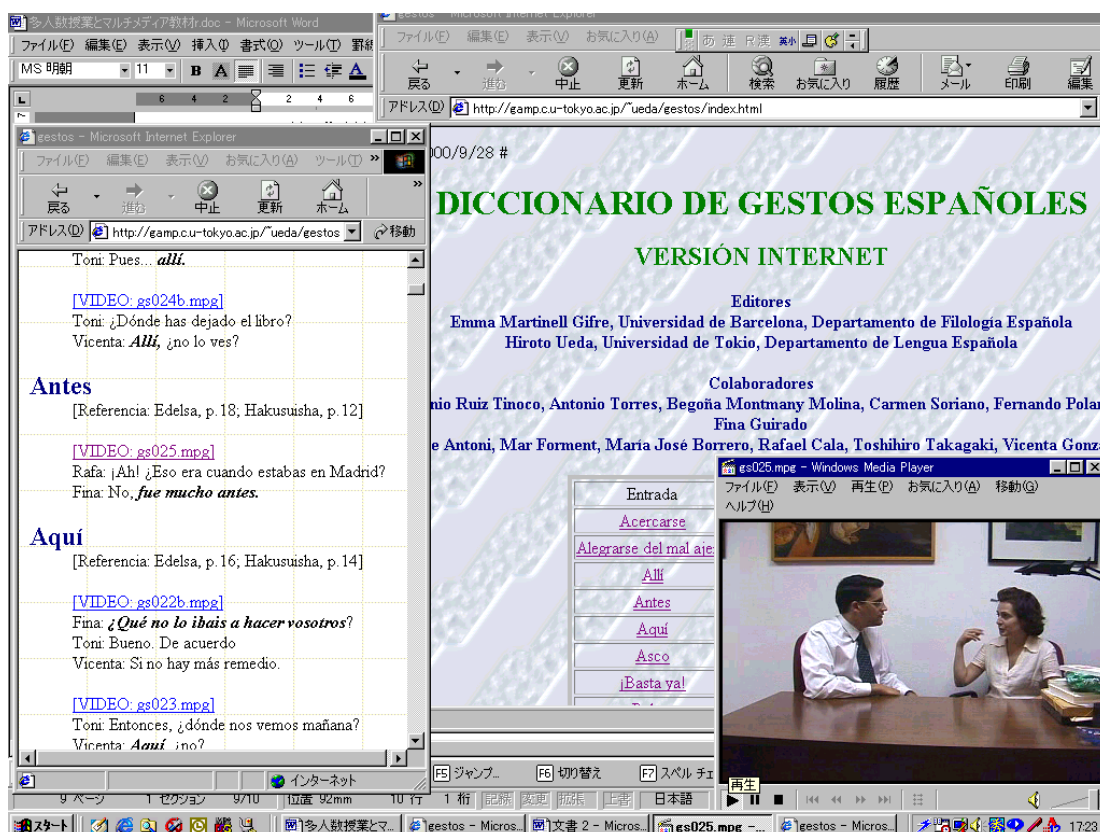


【図-9】 <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/inv/rinku.htm> (Hirotō Ueda)

(4) 評価・成績・アンケート。一人の教師と多数の履修者の間での情報交換として、全体・個別の達成度テストや授業評価アンケートを HP 上で動作させることができる。従来の記入式のアンケートは、アンケート用紙の用意→アンケートの実施→回収→コード化→入力→分析ソフト作成→実行，という手順を踏まなければならない。多人数では膨大な労力と時間がかかる。HP 上でリアルタイムで実行されれば、その結果を即座に教育に反映できる。また、学生へのフィードバックも容易である。

(5) 研究から教育へ。大学のスペイン語の教官の中でスペイン語教育の専門家は少なく、自分の専門領域とは別に前期教育（教養課程）でスペイン語を担当している者がほとんどである。言語の研究者も同じで、言語学・スペイン語学を研究しているからといって、それが必ずしもスペイン語教育を専攻しているとは言えない。そこで、研究と教育の両立という問題が常につきまとう。この問題をうまく解決しない限り、教育に情熱がわからないし片手間の作業になってしまう。たとえば、HP 上で研究と教育の間の橋渡しをすれば、学生への副教材として自らが関わる研究の最新のデータを提示できるし、学生もそれなりの緊張感が生まれるだろう。

たとえば、図-10 は現在筆者らがバルセロナ大学のスタッフと共同で進めているスペイン語の非言語コミュニケーションの研究で得られた目録であるが、これなどは初級スペイン語の授業でも活用できる。



【図-10】 <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/gestos/>

(6) 教育から研究へ. 先に触れた HP 上で実施される自動化されたアンケートは, 学生を対象とするエラー・アナリシスや筆者が提案するトランスリンガル・アナリシス (Ueda 1994, 上田 1994, 1997) に格好の材料を提供してくれる. 文法問題や作文に見られる学生の間違いと授業内容・学生の属性との相関関係を調べるには, テキストファイル化された回答がもっとも扱いやすい. また, それらのデータを処理する過程で, 日本人にとって特有の文法・意味問題が浮かびあがるはずである. これらは, 従来の書籍だけに頼る文法研究を改めて, 教室, さらにネットを通したコミュニケーションの場を言語研究のフィールドに変える可能性がある.

(7) 共有リソースとしての教材. これまでスペイン語教育における情報技術の利用法が理想的なものばかり挙げてきたが, 実は個人としての利用する上で, 一番大きな問題をあえて避けてきた. それは, 教材準備のために膨大な時間と労力である. 費用対効果 (コスト・パフォーマンス) を少しでも上げるためには, 個人のレベルでの教材の再利用と研究・教育者間の教材の共有リソース化が考えられる. 一度作成された各種のファイルは, 紙や音声・ビデオテープのような劣化がなく, 無限の再利用が可能である. よって, 現在進行中の教材準備は, 多くの費用 (労力と時間) がかかろうとも将来のための投資であると言える. それだからこそ作成者もがんばるのであって, 一回きりの利用のための作業であれば誰でも後込みをしてしまうだろう. また, 旧バージョンのベースがあって, それを更新していく作業は建設的であり有意義さが感じられる.

しかし, 教材の再利用に増してさらに飛躍的な発展が望まれるのは, 研究・教育者間のネットワーク作りとリソースの共有である. インターネットではファイルを HP に埋め込むことができるので, アクセスさえすればテキスト・音声・画像・ビデオを自分の PC に取り込み, 固有の利用法を生み出す. そのために, むしろ高度にソフィスティケートされた (不自由な) コースウェアよりも, 自由裁量がきく素材の提供のほうがありがたい. 世界中の WEB サイトの中にはボランティアで, 各種のソフトウェア, HP 用の素材, 音声ファイル, 音声記号などの特殊文字を提供しているものがある⁶. 筆者も言語資料・教材の圧縮ファイルをダウンロードできるように HP の各所に張り付けているが, まだまだ材料不足である. 日本のスペイン語教師の HP のネットワークが, さらに広がることを期待したい.

5. 終わりに

⁶ たとえば次の SIL (Summer Institute of Linguistics) のサイトでは音声表記に必須のフォントが無償でダウンロードできる:

SIL Encore IPA fonts <http://www.sil.org/computing/fonts/Encore-ipa.html>

また, 次の Speech Analyzer はすぐれたソフトウェアであり, しかも無料である.

<http://www.sil.org/computing/speechtools/speechanalyzer.htm>

西垣 (1995:199) は、マルチメディアの文化的影響について次のように述べている。

「(…) 扱う対象が論理的な記号や数値ではなく、音声・画像・動画などわれわれの感性に直接訴えるものであるから、マルチメディアの文化的影響はおそろしく深甚ではないかと予想される (….) あえて言えば、これによって途方もない知的荒廃がもたらされる可能性がないとはかぎらないのである。」

また、Cebrián(1996)は、教育におけるインターネットの利用の問題点として、膨大な時間の必要、利用者の引きこもり、中毒、誤れる「自由」の感覚などを指摘している。

これらは十分に納得のゆく指摘であり、マルチメディアの利用者・作成者として常に銘記しておかなければならない。しばしば、「それは利用（消費）の仕方次第である」という意見が聞かれる。これは、すべて中毒性のあるものについて言えることであり、根本的な解決にはつながらないだろう。むしろもっと積極的に考えるならば、マルチメディアに振り回されない（「使われない」）ために、それを主体的に駆使していくことが重要である。そこでは、「受け身一方ではなくこちらから情報発信していく姿勢が決定的に大切なのである」（西垣、同：207）。教材に関して言うならば、既成のマルチメディア教材のお仕着せでなく、素材を提供することによって利用者の裁量による自由で積極的な活用を可能にすることが望まれる⁷。

スペイン語部会では、先に述べた授業の再編成と統一教材の作成をセットにした改革を実施している。本年度(2000)は試行期間なので授業の再編成は実行したものの旧教科書（リャノ他 1997）を採用したままである。来年度からは新教科書に沿って、授業も新方式に移行できるはずである。それらの結果については今後報告していきたい。

<引用文献>

- Cebrián, Juan Luis. 1996. "Hipnosis, caos y espectáculo", *XI semana sobre "Aprender para el futuro"*, Fundación Santillana en Madrid.
- Echeverría, Max. 1994. "Aplicaciones computacionales para la enseñanza - aprendizaje del español como lengua materna", *Revista de Estudios de Adquisición de la Lengua Española*, Universidad de Alcalá de Henares, 1, pp.25-50.
- _____. 2000. "Desarrollo de la metacognición lingüística mediante apoyo computacional", *Revista de Lingüística Teórica y Aplicada, Concepción (Chile)*, 38, pp.61-74.
- Hotta, Hideo. 2000. "Materiales didácticos audiovisuales del español elemental por HTML y su uso en la clase", *Studia Romanica (Societas Japonica Studiorum Romanicorum)*, 33, pp.66-74.
- Ministerio de Educación y Cultura de España, 2000. "Método y gramáticas E / LE", pp.22-25.
- Ruiz Tinoco, Antonio. 1997. "El correo electrónico y la enseñanza del español", *Bulletin of the*

⁷ そのために、東京大学スペイン語部会編 (2000)では、すべての pdf, doc, wav, jpg, avi, txt ファイルを再利用可能な形でフォルダーに収めてある。

- Faculty of Foreign Studies, Sophia University*, 32, pp.45-60.
- Universidad de Salamanca / Radiotelevisión Española, 1993. *Viaje al Español*.
- Ueda, Hiroto. 1994. "Aproximación translingual a la lengua española", *Revista de Estudios de Adquisición de la Lengua Española*, 1, pp. 157-172.
- _____. 2000. "Eenseñanza del español como segunda lengua extranjera. Nuevo método y nuevos materiales", *Comunicación oral en S.E.L.E.* 2000/8/1.
<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/public.htm>
- 上田博人. 1997. 「日西対照研究とエラーアナリシスとトランスリンガル・アプローチ」『日本語と外国語の対照研究 I : 日本語とスペイン語 (1)』国立国語研究所, くろしお出版, pp.143-164.
- _____. 1994. 「動詞と格標識 : 日本語とスペイン語のトランスリンガル分析」『日本語とスペイン語との対照研究 V. 日本語とスペイン語(2)』くろしお出版, pp.185-218.
- _____. 2000a. 「第二外国語としてのスペイン語教育. 文法の意識化と「授業レポート」」『スペイン語学研究』 15, 83-98. 2000/8/1.
<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/ronbun.htm>
- _____. 2000b. 「第二外国語のスペイン語教育. 授業方法と教材」『CD-ROM で学ぶ初級スペイン語』(教授用参考資料) 朝日出版社.
- 上野勝広. 1995. 「体験的スペイン語ビデオ教材活用論」ハンドアウト, 東京スペイン語学会, 1995/5/27.
- 倉橋英逸・大城善盛・赤尾勝己・村上泰子. 2000. 『Web 授業の創造. 21 世紀の図書館情報学教育と情報環境』関西大学出版部.
- 四宮瑞枝. 2000. 「大学のスペイン語文法授業の改善. 「授業レポート」の効果と学習意欲の問題を中心として」『スペイン語学研究』 15, p.99-119.
- 高垣敏博・上田博人・Raúl Ávila. 1996. 『都市を読む辞典. 街かどで見たスペイン語. メキシコ編』三省堂.
- 高垣敏博・上田博人・Emma Matinell, María José Gelabert. 1998. 『スペイン語ジェスチャー小辞典』白水社.
- 高橋覚二. 1993. 「コンピュータによるスペイン語教育実践」『電腦外国語大学』pp.162-173.
- _____. 1994. 「パソコンを教具としたスペイン語教育のひとつの試み」『イスパニカ』 38, pp.91-104.
- 田中俊明・田畑義之. 2000. 『マルチメディア時代のドイツ語教育』九州大学出版会.
- 東京大学教養学部. 2000. 『東京大学前期課程教育授業外部評価報告書. 中間報告 2』
- 東京大学スペイン語部会編. 2000. 『CD-ROM で学ぶ初級スペイン語』朝日出版社.
<http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~ueda/curso.htm>
- 西垣通. 1994. 『マルチメディア』岩波新書.
- 堀田英夫. 1990. 「パソコン利用の外国語自習法」『愛知県立大学外国語学部紀要』 22, pp.265-305.
- _____. 1992. 「パソコン利用のスペイン語学習・教育」, 『愛知県立大学外国語学部紀要』 24, pp.213-231.
- _____. 1999. 「CALL 教室でのスペイン語教育. HTML で作成した教材を利用して」, *CIEC (Council for Improvement of Education through Computers)*, 7, pp.70-74.
- リャノ・ハビエル, 上田博人, インマクラダ・マルティネス, 1997. 『初級スペイン語』

朝日出版社.